

## ～旧約聖書を読んで感じること～ (41) 士師記(8)士師サムソンとデリラ



遺跡のモザイク イスラエル

サムソンの怪力はペリシテの人々の知るところとなり、なんとかサムソンを殺そうと図りましたが、サムソンに敵う者はいませんでした。やがてサムソンはソルクの谷に住むデリラという女性を愛するようになりました。ソルクの谷はサムソンの故郷ツォルアや、最初の妻の故郷ティムナの近くにあります。そこでペリシテ人の領主たちはソルクの谷までやって来て、デリラに、銀 1100 枚を与える約束をして、サムソンの怪力の秘密を告げてほしいと頼みました。

デリラは金の魔力に負けて、サムソンに愛されているのをいいことに、甘えたように尋ねました。

サムソンに言った。「あなたの怪力がどこに秘められているのか、教えてください。あなたを縛り上げて苦しめるにはどうすればいいのでしょうか。」(士 16:6)

サムソンは、乾いていない弓弦 7 本で縛れ、新しい縄で縛れ、髪の毛を機の縦糸と共に織れ、などと次々とデリラに教え、その都度デリラは人を密かに待ち伏せさせておいては試しました。けれどもサムソンはその都度笑い飛ばすかのように、弦、縄、糸を断ち切ってしまいました。デリラの傍で愛欲に溺れる日々を楽しみ、怪力を誇るサムソンに恐れるものはありません。



サムソンとデリラ Gustave Moreau

デリラはとうとう、「あなたの心はわたしにはないのに、どうしてお前を愛しているなどと言えるのですか。もう三回もあなたはわたしを侮り、怪力がどこに潜んでいるのか教えてくださいなかつた。」(士 16:15)

と言って、来る日も来る日もしつこく迫ったので、サムソンは耐えきれず、死にそうになり、ついに心の中を一切打ち明けました。

「わたしは母の胎内にいたときからナジル人として神にさざげられているので、頭にかみそりを当てたことがない。もし髪の毛をそられたら、わたしの力は抜けて、わたしは弱くなり、並の人間ようになってしまう。」(士16:17)

ナジル人の秘密を明かしたサムソンを、膝を枕に眠らせ、デリラはサムソンの髪の毛を剃りました。主がサムソンから離れたことをサムソンは知りませんでした。いつものように、暴れに出かけた時、ペリシテ人に捕えられ、目をえぐり出され、ガザに連れて行かれました。牢屋で、青銅の足かせをはめられ、粉ひきをさせられました。けれども彼の髪の毛はまた、伸び始めていました。

ペリシテの領主たちは集まり、彼らの神殿ダゴンに盛大にいけにえを捧げて喜び祝いました。その時、上機嫌になった彼らはサムソンを見世物にして楽しむことにしました。サムソンは神殿に連れ出されました。彼は 2 本の柱につかまらせてもらい、主に祈って言いました。

「わたしの神なる主よ。わたしを思い起こしてください。神よ、今一度だけわたしに力を与え、ペリシテ人に対してわたしの二つの目の復讐を一気にさせてください。」(士 16:28)

そして力を入れて柱を押した時、ダゴンの神殿は、領主たちだけでなく、そこにいたすべての民の上に崩れ去りました。サムソンは自分の死をもって、ペリシテに復讐しました。

サムソンの兄弟たち、家族の者たちが彼を引き取り、父マノアの墓に運び、そこに葬ったと記されています。無邪気で、女性に弱い、怪力のサムソンは憎めない英雄なのでしょう。



サムソンとライオンの噴水  
サンクトペテルブルグ



サムソンとバの顎骨  
Giambologna